

営業数字はほぼ実録

企業は従業員でさえ見たことのない
闇の部分を持っている。

そしてある日、従業員から経営幹部
になって、あるいは担当部署に配属さ
れ、それを知って愕然とした後、大き
な葛藤を覚える。

(自分は大人しく闇に吞み込まれるべ
きなのか、それとも闘うべきか?)

たいていは前者だろうが、本書の主
人公・番匠啓介は闘う道を選んだ。

舞台となる企業はトウボウ株式会社。
本書中にこういう紹介がある。

「東京証券取引所市場一部に上場する
一〇〇年ほどの歴史を誇る超名門企業
(中略) 当時の上場銘柄で今日まで名
をとどめている企業は日本郵船、東京

江波戸哲夫の 『責任になる一冊』

『責任に時効なし』

小説・巨額粉飾

著者は「カネボウ巨額粉飾事件」発覚当時の同社経理担当常務、
本書は小説形式を借りた「ノンフィクション」である。

歴代経営者が連続と続けた粉飾により、後戻りできなくなっていた
カネボウが崩壊するまでを克明に描いた告発の書といえる。

瓦斯、東京海上火災保険とトウボウの
四社だけである」

つまりトウボウとはカネボウのこと
であり、番匠はそこで財務経理担当の
常務まで務めた著者その人である。小
説と銘打っているが、営業数字等ほと
んど実録である。

冒頭からカネボウのキャッチフレー
ズ「フォー・ビューティフル・ヒューマ
ンライフ」が悪い冗談に思える醜い経営
実態が明らかにされる。

社長・副社長のコンビは、「連結債務
超過解消と胸を張っていた裏で (中略)
連結から外されていた東洋染織の実損
額を約三〇〇億円も膨らませるとい
う大失態を演じてしまった。トウボウか
ら東洋染織へ流出した資金は (中略)
四四〇億円にもなった」
実態は大赤字なのだが、社長・副社
長コンビはこれを粉飾して黒字にしよ

うと経理部門に強い圧力をかける。

ありのままの数字を出す経理部長、
沢木を副社長が怒鳴り飛ばす。

「お前たちは、会社更生法でも申請す
るつもりなのか!」「何だこの数字は?
てめえらバカか!」

トップの意向に逆らった数字を出せ
るのは、番匠がバックアップしている
からだだが、それでも沢木にはプレッ
シャーが大きすぎた。トップに粉飾を
避ける提案をしている最中に声を失い、
椅子からずり落ちそうになる。

番匠はその後もぎりぎりまで経営
トップに逆らい続けるが、やがて粉飾
が公になり、トップとともに番匠も
財務責任者として逮捕されてしまった。

これ以降の展開を紹介することは控
えるが、番匠はどうして彼らに抵抗し
続けることができたのか? 読んでい
る間ずっとその疑問が浮かんでいた。



えびとつお
作家。1946年、東京
都生まれ。東京大
学経済学部卒業。
三井銀行(当職
時)を1年で退職
し、出版社に勤
務。83年から作家
活動を開始する。
以後、主に政治、経済周辺に題材を
とった作品を精力的に発表している。著
書に『小説大蔵省』『柔らかな凶器』『集
団左遷』『辞めてよかった』『会社葬
送——山一證券、最後の株主総会』
『神様の墜落こそごとく興銀』の失われ
た10年』『小説盛田昭夫学校』『くだ
れば成果主義』『団塊世代の二万二千
日』『リーダーシップ原論』等多数。
PHOTO:岡村啓嗣

数年前、番匠はお荷物だったアクリ
ル事業部門の責任者を命じられた時
長年のしがらみをものともせず、全面
撤収することに成功した。

(経営課題に正面から取り組む)

それが体質となっている人物だから
である、というのが一応の疑問への答
だ。そういう人物がいれば沢木よう
にひ弱なサラリーマンもかなりのとこ
ろまで権力者と闘える。

保身過まく企業社会に番匠のような
人が存在したことは驚異であるが、彼
が例外ではないと信じたい。



嶋田 賢三郎著
アートデイズ刊
定価:1800円+税